追悼中内敏夫先生―その学問を振り返る

一橋大学　木　村　　元

中内敏夫先生は、本年（2016年）３月22日に85歳で急逝されました。心より哀悼の意を表します。

わたしにとって中内先生は、指導教員と学生といった制度的な師弟関係にあったわけではありませんが、教育学・教育史研究者の先達として、また職場の前任者として多くのものを学ばせていただきました。大学院生の時期に民間教育史料研究会でご一緒させていただいて以来、謦咳に接してさまざまな場面で多くを学んできました。教育の事実や営為をとらえる切り口の意外性や叙述の独特さがそうさせたのでしょうが、新しい世界を描き出され、ものの見方がゆすられてきたというのが先生への印象としてまずあげられます。ただし、こちらがそれに触発されて、その教えを表現しようとしてもそれは容易ではありませんでした。それはそう簡単に自分のものにできるわけではなく、無理に受け入れようとすると「中内敏夫」そのものになってしまう。つまり、自分の骨身に刻まなければつかいきれないものであるといえます。また、中内先生の学問はそのユニークさから批判されることもあったようにおもいますが、その多くは先生の学問の中核を射貫くものではありませんでした。中内先生の学問は、その体系性に真骨頂があり、部分を批判してもその内側には簡単に届かなかったといえるのではないでしょうか。

中内先生の教育学と教育史の研究の特徴は、よい教育のあり方を問題とする教育学研究と、各時代の実際の人々のレベルでの教育の現れ方を問題とする歴史研究の、二つの車輪から成り立っています。先生の教育（学）の捉え方の特徴は、ものを作ることにちかいものでありながら、そのようにすると人々のなかから反発がうまれ容易にその行為を貫徹させない、そのダイナミズムの中に近代の人間形成である教育をとらえたものとわたしは理解しています。耳目に入りやすい安易な教育研究を退けながら、このような教育の事実のとらえかたのうえで人づくりの特徴と困難さを示そうとされました。決して調和的でないうえに「裏地を仕立てるような」細心な人づくりをなす、すなわち＜教育という事実をつくる＞ことの難しさに立脚した教育と社会の学を構成しようとされました。こうした矛盾的で困難なものとしての教育の把握は、その中核に、教育評価論研究と教育の社会史研究をおいた先生の学問の枠組みに現れているとおもいます。

教育評価研究は教育学研究の核に位置づいていると考えます。ですから、先生の教育学は狭義の教育学研究である教育評価研究と教育の社会史研究を土台とした広義の教育学を構成するというふうにわたしは理解しています。ただし、教育評価研究と教育の社会史研究という二つの領域の関係について、先生の学問がどのようにつながっているかの理解が難しいとされる向きが多かったのではないでしょうか。渺々たる産育の人間形成を歴史のなかに照らしながら教育という行為の特殊性を洗い出す作業と、近代の制度化された学校という機関において学力保障の具体的なあり方を模索する到達度評価研究がどのように位置づくのか、その矛盾を指摘することも少なからずみられたようにおもわれます。しかしわたしの理解では、一方で、教育の歴史的な事実を人間形成の広がりのなかにおいてとらえ、それを踏まえながら教育のなかでアキレス腱にもたとえられる教育を評価することの現実のあり方や意味を考える。他方、困難な営為の実際を歴史的な広がりのなかにおいてその時代の「教育的なるもの」の固有な性格や位置づけを探る。こうした教育評価研究と産育を含む教育社会史研究という広がりをもった教育史研究をいわば楕円的な同心円として配しながら、意図通りに貫徹しないばかりか対立と矛盾を内包する一筋ではならない教育という営為をとらえだそうとしていたのではないか、またそのために両者を軸におくことが欠かせないものとしてあったのだとおもいます。

それにしても先生のお若い時代に、たとえば岩波講座『現代教育学』所収の「教育評価」や『日本の学校』などの初期の作品の中に、すでにその片鱗がはっきりと描き出されているのには驚かされたものです。中内先生の学問は、教育学と教育史研究が相互に補完し合いながら結びつき、教育と社会の総合的な学（研究）の視座を切り拓く体系的な構造を持っており、強い磁場をもつものでした。下手に近づくと飲み込まれてしまう、外側からなぞるだけでは狭量になってしまう。こちらの力量が常に問われるところに怖さがあり、浅い読み取りを拒絶する迫力がそこにありました。

ただしそのことは、逆にこちらの問題や対象の把握が深まれば新しい発見を促す強力な指針となるように存在していたといえます。わたしは、そうした中内先生の築かれた教育と社会研究の遺産を生かしうるように、大きな変動にある人文・社会科学の状況のなかで、自らのディシプリンを再確認しながら新しい社会に対応しうる内容を構築し続けていきたいと意を新たにしております。このことをお伝えして先生への追悼の意に代えさせていただきたくおもいます。